

「10年目の春を迎えて」

ケアサポートえん／遠野瑞穂

社会人になり、早 5 年が経ちました。毎年お盆もお正月も休まず働いていますが、自分の誕生日と 3 月 11 日だけは必ずお休みすることに決めています。誕生日は言わずもがな、3 月 11 日は忘れたくても忘れられない特別な日だからです。

2021 年 3 月 11 日、関東は朝から青空が広がり、春らしい陽気が漂っていました。故郷で家族とこの日を迎えたい気持ちをぐっと抑え、震災関連の情報が入ってこないようテレビや携帯から距離を置き、部屋でひとり過ごしていました。それでも「3 月 11 日」というだけで、当時の記憶や感情がぽつりぽつりと沸いてきます。

故郷は甚大な被害を受けた陸前高田ですが、家族と自宅は無事でした。高台にある高校で被災したおかげで、私は津波が押し寄せるさまを見ていません。5 日間の避難所生活を経て、父の迎えで家に帰りました。しかし、朝一緒に登校した友達は還らぬ人となり、父の車や職場は流され、自宅のライフラインが復旧するまでには数ヶ月の時間を要しました。私たちは一括りに「被災者」と呼ばれました。家族を亡くした友達や自宅を失った友達が半数以上いた中で、「家族と自宅が無事＝恵まれている」という考えが頭から離れず、私自身「被災者という名に相応しくないのでは？弱音を吐くなんて、そんなこと出来ない」と思い続けていました。

止めどなく沸いてくる感情を抑えられず、定休日だった父に電話をしました。久しぶりに聞く父の声と「こっちも良い天気だよ」に思わず涙が溢れました。それから当時の話をし、父は「あの時、死んだ方がどんなに楽だったかと思ったよ」と言いました。町内の消防団に所属していたため、被災してすぐに遺体捜索を開始した父。薄れていく記憶が沢山ある中で、1 人目の遺体を発見したときの衝撃は今でも忘れられないと話していました。当時一度も弱音を吐かなかった父が、実は死にたいくらいの辛さを抱えていたことを初めて知り、「葛藤があったけれど、私も本当は辛かったんだよな」と思いました。状況は違ってても皆が被災者で、それぞれの辛さを経験したのだと。

14 時 46 分、電話越しに防災無線のサイレンを聞きながら、東北を、岩手を、大切な人達を想い、黙祷をしました。変わりゆく故郷の景色と変わらない記憶と共に、これから先も生きていこうと思います。



カット／えん細井美風